

「マタイ22章」

イントロ:

1. 文脈を確認する。
 - (1) 21章以降、エルサレムでの最後の1週間に入る。
 - (2) 過越の祭りは出エジプトを記念する祭り。
 - (3) イエスは、神の小羊としてエルサレムに入城された(ヨハネ1:29)。
 - (4) 出エジプト 12:3~7
 - ①イエスはニサンの月の10日に選り分けられた。
 - ②ニサンの月の14日まで吟味された。
 - ③ニサンの月の15日に十字架に付けられた。
2. 4つのグループがイエスに挑戦する。
 - (1) 祭司長と民の長老たち(サンヘドリン)(21章で取り上げた)
 - (2) パリサイ人の弟子とヘロデ党の者たち
 - (3) サドカイ人たち
 - (4) パリサイ人たち
3. きょうの箇所は、私たちにとってどういう意味があるのか。
 - (1) ユダヤ的視点で聖書を読むことの重要性を教えられる。
 - (2) イエスが本物のメシアであるかどうか確認できる。
 - (3) 神学的理解が深められる。

4種類のグループによって吟味される神の小羊

I. 祭司長と民の長老たち(サンヘドリン)

1. 彼らは、イエスの権威を問うた。
2. イエスは3つのたとえ話をを用いて、間接的に彼らに答えた。
 - (1) ふたりの息子のたとえ
 - (2) 悪い農夫のたとえ
3. 結婚の披露宴のたとえ
 - (1) 「結婚の披露宴」は、メシア的王国(天の御国)を表している。
 - (2) 招待しておいた客を呼ぶ「王」は、父なる神。
 - (3) 遣わされた「しもべたち」は、バプテスマのヨハネとその弟子たち。
 - (4) 次に遣わされた「別のしもべたち」は、12弟子。
 - (5) 彼らは、宴会の準備がすべて整ったからお出かけくださいと誘う。

- (6) 招かれた者たちはその招きを無視。さらに、王のしもべたちを殺す。
 ①バプテスマのヨハネとイエスの殺害
- (7) 怒った王は、兵隊を出して彼らを滅ぼし、その町を焼き払う。
 ①紀元70年にエルサレムは崩壊し、ユダヤ人たちは世界中に離散した。
- (8) 結末
 ①通りで出会った者をみな集める。第一義的には患難時代のユダヤ人たち。
 ②適応において、異邦人である私たちもまたここに含まれる。
 ③婚礼の礼服を着ていない者がひとりいた。
 ④王は怒って、その者を「外の暗やみ」(地獄のこと)に放り出せと命じる。
 ⑤当時は、主人が入りに礼服を用意した。礼服は「義の衣」を象徴。
 (例話)ある人の疑問:イエスを信じない人は地獄に行くというのは承服できない。
 イエスは本当に地獄の存在を教えたのか。
 ⑥パリサイ的ユダヤ教では、神の国に入れない。義の衣(礼服)が大切。

II. パリサイ人の弟子とヘロデ党の者たち

1. 奇妙な組み合わせ

- (1) パリサイ人たちは政治的には反ローマ。
 (2) ヘロデ党の者たちは親ローマの立場。
 (3) 両者は、イエスを共通の敵としていっしょに行動している。

2. 政治的テーマを使ってイエスを有罪に追い込もうとした。

- (1) 「カイザルに税金を納めることは、律法にかなっているかどうか」
 (2) どちらに答えても問題が起こる。
 (3) イエスと答えると、民衆は怒る。
 ①カイザルを王と認めることは、イスラエルの神を退けたことになる。
 ②ユダヤ人は間接的にはローマに税を納めていた。
 ③ここでは、直接的かつ積極的に税を納めるべきかが論じられている。
 (4) ノーと答えると、反逆罪のためにローマの官憲によって逮捕される。
 ①イエスが死刑に処せられることを、敵対する者たちは望んでいる。

3. イエスの知恵

- (1) ローマに納税するデナリ貨には、「カイザル」の肖像が刻まれていた。
 (2) この貨幣を持つことは偶像礼拝に当たると考えられていた。
 (3) ユダヤ人たちがこれを神殿税のために用いることはなかった。
 (4) イエスは「カイザルのものはカイザルに、神のものは神に」と宣言。

(5) これによって確立された原則

- ①権威には、神の権威とこの世の権威(政府)の2種類がある。
- ②創世記9章以降、どの時代でも地上にはこの世の権威(政府)が存在した。
- ③問題は、どちらに従うかではなく、両方に従うということ。
- ④この世の権威は一時的なもの。
- ⑤やがて恒久的な権威が確立される。ダビデの子が統治するメシア的王国。

III. サドカイ人たち

1. サドカイ人とは

- (1) 貴族階級、祭司階級からなる体制派のグループ。
- (2) 神学的には死者の復活を否定。これがパリサイ人との大きな違い。
- (3) 彼らの質問は、神学的なもの。公の場でイエスを辱めるため。
「7人の兄弟が子を残さずに次々と死んだ場合、彼らの妻となったひとりの女は、復活の世ではだれの妻になるか」(申命記 25:5 参照)。

2. イエスの答え

- (1) イエスは彼らの誤解を指摘する。
 - ①そういう質問をする理由は、聖書も神の力も知らないから。
 - ②次の世では結婚関係はない。結婚して子孫を残す必要がなくなるから。
 - ③それはちょうど、「天の御使い」が結婚しないのと同じ。
 - ④創6章では、墮天使たちが人の女たちと結婚している。良い天使と区別する。
- (2) 復活の真理が聖書にあることを証明する。
 - ①聖書とは、今で言う旧約聖書。
 - ②旧約聖書の中で復活を明確に預言している箇所がいくつかある。
 - * ダニエル書 12:2
 - * イザヤ書 26:19
 - * ヨブ記 19:25~26
 - ③イエスは、これらの箇所ではなく、出エジプト記 3:6 を引用。
 - ④サドカイ人は、教理に関してはモーセの五書(トーラ)だけに権威を認める。
 - ⑤「わたしは、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である」
 - ⑥神はアブラハム契約を結んだ神である。厳粛な神の御名。
 - ⑦アブラハムも、イサクも、ヤコブも、約束が成就する前に死んだ。
 - ⑧神には約束を実行する責務がある。約束の受け取り手が復活する必要がある。
(例話)アブラハムがイサクを捧げた理由。
 - ⑨イエスは、アブラハム契約そのものが復活を保証していると解説した。

3. 聴衆の反応

- (1) 新しいみことばの解説に、群衆は驚いた。
- (2) パリサイ人たちはイエスの知恵に驚いた(ルカ 20:39～40)。
- (3) サドカイ人たちは沈黙した。

IV. パリサイ人たち

1. パリサイ人の中の律法の専門家が挑戦。

- (1) イエスを試そうとして神学的な質問を投げかけた。
「先生。律法の中で、たいせつな戒めはどれですか」
- (2) パリサイ人たちは聖書には613の戒めがあると教えていた。
- (3) この質問にどう答えるかによって、イエスの律法理解の程度が分かる。

2. イエスの答え

- (1) イエスは旧約聖書の教えを2つの戒めに要約した。
- (2) 「律法全体と預言者」とは、旧約聖書のこと。
- (3) 第1の戒め
「心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ」
①「シエマ(聞け)」と呼んで、日々朗詠する有名な箇所(申命記6:5)。
②神との関係は、この戒めを守ることによって正しく保たれる。
- (4) 第2の戒め
「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ」
①隣人との関係は、この戒めを守ることによって保たれる。
- (5) 「神への愛」と「隣人への愛」を実践するなら、戒めがすべて守られたことになる。
①アダムが罪を犯したのは神への愛がなかったから。
②私たちが他人を傷つけるのは隣人への愛がないから。

結論

1. ユダヤ的視点で聖書を読むことの重要性
2. イエスは本物のメシアである。
3. 神学的理解が深められた。
 - (1) イエスの権威:義の衣をまとうていなければ神の国に入れない。
 - (2) 神の権威と地上の権威の関係
 - (3) 復活は真実である。
 - (4) 愛こそ律法のゴールである。